

第一、第二、第三と收容所を通り、昭和二十四年七月二十三日恵山丸に乗船、七月三十日復員。七月三十一日郷里新潟県村上町（懐かしの故郷）に帰り当日は駅頭に埋めんばかりの出迎えの人と日の丸の旗を見て感激した。

シベリアの思い出

新潟県 小林 常 太

一九四五年八月十六日、北朝鮮トモンを見下ろす小高い丘陵地のある鐘城の幕舎の前でT小隊長が整列した私たちに「今日から我が国に軍隊はなくなつた」と敗戦を告げた。前日まで大隊砲観測隊員だった私は、ソ連機によるトモン陣地空爆と我軍高射砲の反撃を小高い丘から観測機でのぞきながら、いよいよ一日、二日のうちに戦闘状態に入ると覚悟を決めていた。そのとき戦闘体制解除、下山、小隊幕舎に集合との命令に接したの

だった。これが一つの結節点だった。その後苦難の新しい道を歩むこととなった。十月中旬ころ荒涼としたシベリア大地の三〇一收容所の地に約千人の戦友たちとトラックから降ろされ、化け物屋敷を目の前にした時、呆然と立ちすくんでしまった。ここからどうして帰国するのだろうか？と。私はここまで来てもまだまだそんなことを考えている二十歳のお人よしだった。旧軍隊の延長線上での抑留生活で軍隊はなくなつたといつても階級支配は続いた。空腹と寒さの繰り返し、虫けら一等兵の苦難は続き、私は三〇一收容所を翌年春押し出され、再びこの收容所に戻ることはなかった。

帰郷を夢見る日々の中でのラポータ、民主運動の激動をもろに受け、その後いくつかの收容所を転々として最後はコムソモリスク市内の收容所だった。

ここで例の「スターリンへの感謝状」なるものを書き残して一九四九年八月帰国している。今、

はるか半世紀以上のことを振り返って、言いたいことは山ほどある。それはお互い様で、みんな同じ思いと考えているし、すでに「ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会」の十冊にも及ぶ記録も残されている。個人のもの、集団のもの、と多様に及んで残されている。

シベリアの思い出

東京都 石川 寛 治

一 昭和二十(一九四五)年一月十日東部二四部隊初年兵として入隊。大雪で遅れる者あり編制完了。一月十八日夜行列車で下関經由釜山經由京城(ソウル)―会寧部隊に行く。

二 歩兵第七五連隊(奉二一一五三部隊)会寧。

三 昭和二十年四月末日初年兵教育終わり五月連隊一同は山洞屯村。北朝鮮豆満江側の陣地構築に入る。場所は洞頓村前方の山は満州の銃砲隊

の陣地構築が行われていた。

四 昭和二十年八月九日阿部軍曹ほか二人と部隊とトモンの衛生大隊に行き、戦時の材料受領に行ったが不足で何も無いので帰隊した。この日、山洞頓村までの地方人の移動が次から次と来て、翌日十日トモンの豆満湖の河原で武装解除を受けた。

五 トモンから夜行で延吉(間東)まで行軍で歩き途中の残骸は見るに忍びないものであった。

六 延吉を出発、千人単位で部隊は徒歩でロシアのソフガニーの山裾に集結、列車で奥地に連れていかれた。列車をおりるとトラックに乗せられて三〇四收容所に入った。翌日三〇一收容所に行った。この時は建物は少なかつた。私は医务室の阿部班長と少したって入った。このとき斉藤軍医、寺岡曹長、阿部軍曹、佐藤、神蔵、石川の衛生兵でありました。

七 昭和二十二年八月医务室より阿部班長とバーニヤ(浴室)に移る。